

『西鶴諸国はなし』巻二の四 「残る物とて金の鍋」考

博士前期課程一年 齋藤優香

井原西鶴による怪異短編集『西鶴諸国はなし』（貞享二年（一六八五）刊）巻二の四「残る物とて金の鍋」は、ある商人が生駒山で生馬仙人と出会う物語である。その仙人は口から酒や食べ物、さらには女性を吹き出し、宴会をした。仙人が眠ると、その女性もほかの男性を吹き出した。その後、仙人は金の鍋だけを残して去っていった。

【第一章】物語の典拠として、本発表では『酉陽雜俎』所収の「羨陽書生」と定めた。典拠では、仙人ではなく書生が不思議な術の持ち主として登場している。また、生馬仙人の典拠として、西鶴が挿絵を手掛けた田中玄順編『本朝列仙伝』を挙げた。住吉の仙人として記述がある。「残る物とて金の鍋」の生馬仙人と共通するのは、その住処と瓜をふるまう点のみであった。

【第二章】「残る物とて金の鍋」の生馬仙人の特徴をつかむため、久米仙人・一角仙人との比較をおこなった。この二人の仙人は、どちらも女人の色香に迷い、情欲によって術を失った仙人である。またその伝説は、近世に至るまで様々な文学に引かれ、広く知られていた。

対して「残る物とて金の鍋」における生馬仙人は、情欲を持ち、

妾がいるにもかかわらず術を失うことはない。その相違点に注目し、生馬仙人を既存の仙人像と区別し新しい仙人像と位置付けた。

【第三章】これまでをふまえ、「残る物とて金の鍋」本文と典拠『酉陽雜俎』との比較をおこなった。女性が自らを仙人の「手掛物」、つまり妾と表現しているが、典拠にはそのような表記はない。また、女性は自分の口から恋人である男性を吹き出し、手をつないで歩いているが、典拠では吹き出した男性と主人公との三人で宴会をしているのみである。どちらの相違点も、典拠に比べ本話の官能的な要素をより高めており、仙人と女性の情欲がはっきりと表されている。つまり、情欲を持たないはずの仙人が術で情欲を叶え、さらに妾に欺かれていることが、滑稽であり、皮肉な面白さなのである。

【第四章】同時代の他作品における仙人像と比較するため、元禄八年刊、林義端『玉櫛笥』『阿蘇の仙境』を扱った。主人公の友人二人が遊女に溺れるが、欲を持たなかった主人公は仙人になる道を与えられる、という物語である。この作品では、情欲を仙人とは無縁のものとして、それらを対比して描いている。対して欲を持ちながら術をも持つ生馬仙人は、この時代にもやはり新しく、独自性の高いものであった。

【第五章】「残る物とて金の鍋」の生馬仙人は、自分の持つ欲をねじ伏せるのではなく、術を使って叶えてしまう。その逆説的な態度は、人間と重なるのではないだろうか。矛盾を抱えながらも欲望を持つ人間の姿が、仙人にとつての情欲という、遠くて実は近いもので見事に表現されている。中世以前の禁欲的な仙人像から離れ、現実を謳歌している、大らかな仙人像を打ち出したことが、人間を写実的に描く西鶴の創作意識を表しているのではないだろうか。